

(第2章)外国人学校とエスニックアイデンティティ：
オールドタイマーのケースから：韓国系民族学校：
金剛学園小・中・高等学校

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学都市研究プラザ 公開日: 2019-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川本, 綾 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2020864

第2章

外国人学校とエスニックアイデンティティ

ーオールドタイマーのケースから：韓国系民族学校：金剛学園小・中・高等学校

川本 綾

■西成のコリアンタウン

大阪市西成区の北西部に、在日コリアンが多く住む一帯がある。被差別部落を含むこの地域には、戦前よりコリアンが居住し、皮革の仕事やナット製造業に携わりながら生活を営んできた。現在もまちを歩くと、名前に「在日大韓」の文字が入ったプロテスタント教会や、コリアンレストラン、食材店などが散在し、西成の在日コリアンの生活の営みと足跡がうかがえる。第二次世界大戦後、この地に、コリアンによる、コリアンのための学校が誕生した。現在は大阪市住之江区に移転した「金剛学園」である。この「金剛学園」は、在日コリアンの歴史と共に時代の流れの中で様々な変容を遂げ、現在は、学校教育法第一条に掲げる教育施設に該当するいわゆる「一条校」として、日本と韓国の教育課程に則った教育を行っている。本節では、コリアン系民族学校の一つである「金剛学園」が西成で生まれた経緯及び現在の教育実践の概要について紹介する。

■解放と民族教育のはじまり

戦後すぐ、祖国の解放にわくコリアンが各地で「国語講習所」を作り、日本生まれの子どもたちに民族の言葉を教え始めたのはよく知られている。コリアンが多く住む西成でもまた、民

族教育を望む気運が高まっていた。『金剛学園 40 年誌』(1986)によると、西成で戦後すぐに結成された「在日朝鮮人連盟(朝連) 西成支部」が、当時空前の好況を呈していた天下茶屋一帯のコリアンの石鹸業者らから寄付を募り、コリアンの子どもたちの学校づくりに乗り出した。そして生まれたのが、1946 年 4 月に誕生した「朝鮮人小学校」、通称「ウリハッキョ(わたしたちの学校)」である。この寺子屋式の民族学校は、区内の公立小学校である松宮小学校、千本小学校の一部を借用して作られ、松宮校を第一校、千本校を第二校と命名して民族教育を開始した。筆者は 2010 年から 2014 年にかけて、男女 10 名の在日コリアン高齢者を対象にライフストーリー調査を実施したが、その中に、この「ウリハッキョ」に通った経験を持つコリアンがいた。幼いころから同地域に住み、戦後すぐに学齢期を迎えたコリアンの男性 B 氏は、「ウリハッキョ」で、京都から来た同胞青年の先生に教えられたことを鮮明に覚えていた。

授業は、「アヤオヨ(筆者注:日本語でいう『あいうえお』)」なろうたり、数学なろうたり、それから、あの、「ニコニコ先生」いう先生はね、ギリシャのことよう知ったね。ギリシャのね、哲学者、あのう、(ソクラテスとか?) そう、ソクラテスとか、アリストテレスとか、今でも覚えてるわ。民主主義はここから生まれたいうて。ものすごく頭よくて、なんでも聞いてくれいいよったわ。今でも覚えてるわ。君らの質問に答えらんことはない、いつもニコニコ、ニコニコしってたけどね。(授業は韓国語で?) 日本語と韓国語と混ざってやな。(B 氏)

上記の B 氏の語りからは、長年の植民地支配から解放された当時のコリアンが、新しい世界、すなわち民主主義を作るために次世代を担う子どもたちに熱意をもって教えていた姿がうかがえる。この後、朝連から脱退したコリアンによって結成された「在日本朝鮮人居留民団(今日の「在日本大韓国民団」)」及び団員の有志を中心に「西成朝鮮人小学校建定期成会」が結成され、校舎の建設に向けた取組みが始まった。

■新校舎の竣工とコリアン間の亀裂

新校舎建設に向け同胞に寄附を募ったところ、当時コリアン業者による石けん景気がますます好況であったのも影響し、募金開始後一か月もたたないうちに230万円余り（今日の20億円に相当）が集まったという。1948年には、民団事務所近くの工場跡地に、総建坪約200坪、木造瓦葺一階建ての校舎二棟の校舎が完成した。巨額の現金のほかに、建築資材の材木、セメントなど、当時入手が困難であった物資を現物で寄付する篤志家もいた。ここからは、持てるものを提供し、何とか民族教育を進めていこうという当時のコリアンの情熱がうかがわれる。当初は「左右いずれにも偏しない厳正中立な教育を実施」という合意のもと、民団系のみならず朝連系の教師、保護者も共に運営に携わっていたが、1948年の南北両国家成立を受けて在日コリアン社会にも分断の影響がもたらされた。1949年4月頃には朝連系の教師及び関係者と民団系の教師及び関係者間の軋轢が深まり、決別が決定的となった。西成朝鮮人学校はその後、韓国の文教施策を順守する教育を実施することを宣言し、韓国系の民族学校として再出発した。また、同年10月には「朝鮮人学校閉鎖令」の影響を受け、学校も閉鎖を余儀なくされるという重大事態が起こった。民団西成支部と学校側は、財団法人校として学校を再開することを当局に申請し、1950年に文部省より正式に認可された。この時、校名を「西成朝鮮人小学校」から「金剛学園・金剛小学校」へ改称し、「財団法人金剛学園」として新たに出発した。そして学園内に保育園も併設し、その後、1954年には中学校が、1960年には高等学校が相次いで開校している。

一方、朝連系のコリアンの子どもたちはどこへ行ったのだろうか。『大阪民族教育60年誌』（2005）によると、1946年の「ウリハッキョ」の後、1947年4月に270名の児童生徒集めて「西成朝鮮人初等学院」が開設され、1949年に「西成朝鮮小学校」が開設されたとある。また、1949年10月の「朝鮮人学校閉鎖令」によって「西成朝鮮人学校」学校が閉鎖された後、「西成地域の同胞たちは港朝鮮学校に子供たちを通わせた」とあることから、朝連系（のちには総連系）の子どもたちは、1949年4月の決別以降、一定程度は朝鮮学校に吸収されて

いったのではないかとと思われる。この後、1960年には朝鮮総連西成支部事務所の2階に港朝鮮学校分校が作られ、1968年には西成朝鮮初中級学校が設立されている（1994年に中級部を東大阪中級学校と統合し、校名を西大阪朝鮮初級学校と改称）。戦後、祖国が解放され、言葉や文化を取り戻した喜びと、いつの日か帰国し、祖国を新しく作り直すことを夢見て、子どもたちの教育に情熱を傾けたコリアンであるが、朝鮮半島の分断という政治的状況を前に、教育の場面でも分裂を深めていったのである。

■韓国系学校としての出発

1950年に文部省の許可により新たな門出を迎えた金剛学園ではあるが、当初より慢性的な財政難に悩まされ、時には教員の給与支給にも窮する状態であった。前出のB氏が勤務していたナット会社の社長は設立当時から民族教育に熱心で、B氏が「従業員の給料は払えんでも、学校の先生の給料ははらったわ」というほど、民族教育に熱意を持っていた。当時の理事長が個人的な資金を活用して、学校運営を続けたこともあったという。1954年には韓国政府から1万ドルの支援も受けるも財政難が解消することはなかった。なお、本国政府からの援助はその後も続いている。また、1963年には学園に隣接している化学工場からの出火により、校舎の大半が焼失してしまう事件も起きた。

1968年には、「金剛中学」を「大阪韓国中学校」に、「金剛高等学校」を「大阪韓国高等学校」にそれぞれ変更する。1972年には、数年にわたり本国文教部に要請していた本国からの派遣校長が就任し、以後、理事長は学園で選出しているものの、学園の校長は本国から派遣されている。



写真 2-1：1960 年頃の金剛学園 写真：金剛学園提供

■一条校への道

1980年代、学園は新たな局面を迎えることとなる。日本の一条校¹としての認定である。これまで文部省認定の一条校ではなかったため、受験資格がないということで、学園の中学校から日本の高校への進学、同じく学園の高校からの日本の大学への進学が難しく、文部省や自治体による私学助成金も受けられなかった。それが学園の発展と運営を妨げていると判断した当時の理事長の決断により、初めて一条校への認可申請を行ったのである。その結果1985年に認可が下り、それに伴って校名を現在の名称である、「学校法人金剛学園、金剛学園幼稚園、金剛学園小学校、金剛学園中学校、金剛学園高等学校」に改名した。ここで、金剛学園は、日本の学校教育制度に則りながらも民族教育を志向するという形態を選択したのである²。

■ともに学ぶ学校へ

西成のコリアンによって支えられてきた学園であるが、校舎の一部が道路拡張の予定地にあったことから、2007年に、西成区梅南より現在の住之江区に移転することとなった。現在は幼稚園が休園となり、教職員約50名の下、小学校、中学校、高等学校合わせて約250名が学んでいる。カリキュラムは、日本の学習指導要領に従いつつ、韓国の正規学習課程も組み込んだカリキュラム編成となっている。2012年に学校関係者にインタビューをする機会を得たが、

¹ 学校教育法第一条において「学校とは、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等学校、特別支援学校、大学及び高等専門学校とする」とあり、ここで規定されている学校を便宜的に一条校と呼んでいる。民族学校のうち、大阪の学校法人白頭学院、学校法人金剛学園、学校法人京都国際学園が一条項として許可されている（『国際高麗学会日本支部「在日コリアン辞典」編集委員会編2010：29）。

² 日本には韓国の在外学校の認可を受けている学校が4校あるが、そのうちの3校が近畿に集中している。学校法人京都国際学園中・高等学校、学校法人白頭学院建幼・小・中・高等学校、そして金剛学園である。そのうち、金剛学園と京都国際学園は1961年に、白頭学院は1976年にそれぞれ認可を受けている。（韓国教育部「2016年在韓国学校現況」

（<https://www.moe.go.kr/boardCnts/view.do?boardID=336&boardSeq=63508&dev=0&searchType=null&statusYN=W&page=1&s=moe&m=030211&opType=N>, 2017.2.5 検索）を参照）。

それによると、授業は基本的には日本語で行われるが、日本語での授業理解が難しいニューカマーの韓国人の生徒には「分班」という形で別途韓国から派遣された教師があたっている。金剛学園は、元来在日コリアンを対象として作られた学校であるものの、在日コリアンの子ども数自体が少なくなっており、在日コリアン生徒のみでの運営は難しい。現在、在校生は、大きく分けて在日コリアン、韓国からの駐在員等の子ども、(朝鮮半島にルーツを持たない)日本人、その他の国籍に分けられる。近年は韓流ブームの影響もあり、朝鮮半島にルーツを持たない日本人が、保護者あるいは本人の希望で入学してくるケースが増えつつあるのが特徴的である。また、日本人の生徒の中には、金剛学園が力を入れているクラブ活動を目的に入学し、入学後に韓国語と出会い、取得した韓国語を一つの資源として活用し、他の言語圏に留学をするケースもあるという。一方、大阪港が近い工業地帯に立地しているという土地柄もあり、日韓以外の文化背景を持つ外国人の子どもも共に学んでいる。

■むすびにかえて

戦後、西成のコリアンが、いつか祖国に帰る日を夢見て始めた民族学校は、長い年月を経て日本社会に根付き、結果的に日本人やその他の国の子どもたちも共に学ぶ場となった。そして、共に学んだ子どもたちが、日本社会へ、韓国へ、そしてまた違う国へと巣立っている。西成のコリアンが蒔いた種が、思いもよらなかった形で花開き、また新たな種子を、近くに、遠くに飛ばそうとしているのである。金剛学園の場合、民族学校でありながら日本の学校教育法に則った正規的教育機関でもあるということが、必ずしもコリアン当事者の望んだ姿であったのかどうかについての判断は一様ではないだろう。しかし、移民の、とりわけ定住歴が長く同化が進みつつあるマイノリティの民族教育の長期的な保障と、時代の変化に伴うホスト社会側のニーズの充足という側面から考えたとき、一つの効果的な形態となっていることは間違いない。ただ、韓国学校、朝鮮学校、民族学級と、コリアンの民族的な文化や言語を守りつつ、日本人と共に生きる術を必死に模索してきた大阪でさえ、数年前、政治的理由を掲げる橋下前大阪府

知事により、朝鮮学校への補助金がいとも簡単に停止された。大阪のみならず、日本各地において様々な形で実践されてきた民族教育に対する認識が、実は脆弱な基盤の上に立っており、政治情勢によってその存亡すらも左右されかねないという日本社会の現実も、また忘れてはならない。

〔参考文献〕

大阪民族教育 60 年誌編集委員会 [2005] 『大阪民族教育 60 年誌』大阪朝鮮学園

学校法人金剛学園 [1986] 『金剛学園 40 年誌』

国際高麗学会日本支部「在日コリアン辞典」委員会編 [2010] 『在日コリアン辞典』明石書店